恋愛しよう　その５

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛しよう　その５

【Ｎコード】
Ｎ８１９０Ｋ

【作者名】
青木弘樹

【あらすじ】
恋愛に縁のない寂しい人生を送っている主人公、堤たけし。
勤めていた工場も潰れてしまって現在フリーター。
さまざまな出会いはあるものの、なかなかうまくいかない。
果たして彼は最後、幸せを手にすることは出来るのか…。

作：青木弘樹

エレベータは待ってられないので、たけしは階段を使うことにした。

必死に階段を駆け上るたけし。

「はあ、はあ」

その頃。

「いや！やめて！まなぶ！」

「いいだろ、けいこ！」

二人はもみあっていた。

「いや！」

けいこの服は乱れていた。

「いいだろ！お互い好き同士なんだし！」

「いや！私は今日、話があってここに来たんだから！」

「話ならあとでゆっくり聞いてやるよ！」

「やめて！」

けいこは泣きそうになっていた。まなぶは少し理性を失っていた。

その時、

”バーン！”

勢いよく、ドアが開いた。

「けいこさん！」

たけしが叫んだ。

「たけしさん！」

けいこが言った。

「…」

まなぶは黙ってたけしを見ていた。

「…」
たけしは足早に近づき、言い放った。
「ばかやろう！」
”パーン！”
たけしはまなぶに思い切り平手打ちをかました！
”ダーン！”
まなぶは倒れこんだ。
「まなぶ！？」
まなぶに近寄るけいこ。
「君は何をやっているんだ！」
たけしは一喝した。
「たけしさん！もういいの！もうやめてあげて！」
けなげにまなぶをかばうけいこ。
「…」
まなぶは我に返ったのか、おとなしかった。
「まなぶ君、見損なったぞ。こんなことをするなんて」
「…」
「さとみさんに振られてショックなのは分かる。しかし、君の事をこんなに思ってくれてる人に、いったい君は何をやっているんだ！」
「…」
言葉が出ないまなぶ。
「たけしさん…」
けいこは泣き出した。
「もういいの。許してあげて。お願い…」
「けいこ…」
まなぶはけいこの優しさに胸をうたれた。たけしの熱い思いにも胸をうたれた。
「まなぶ君、君はそんな人間じゃないはずだ。君はかつて僕を救ってくれた。目を覚ますんだ、まなぶ君」
「たけしさん…」

「まなぶ…私がずっとそばにいるから…。だから昔のまなぶに戻って…おねがい…」
けいこはずっと泣いていた。
「…」
たけしは真剣な目でまなぶを見ていた。
「たけしさん…俺、どうかしてたよ。こんなに思ってくれてる人が、そばにいたのに…」
「まなぶ君…」
「けいこ…ごめん。君の気持ちをずっとないがしろにして…」
「まなぶ…」
「俺は…ホストをやめるよ。真面目に働く」
「まなぶ…！」
「まなぶ君…」
まなぶはやっと気づいた。誰を愛するべきかを。
「…」
たけしは黙って去ろうとした。
「たけしさん…」
まなぶが呼び止めた。
「幸せにな。俺はちょっと用があるから」
「用？どんな用ですか？」
「決まってるだろ？これからナンパに行かなくちゃ」
たけしはニヤリと笑った。
「ふふふ…」
「あはははは…」
笑顔で笑いあう三人。その後たけしは静かに去っていった。
そして、車に乗り込み、たけしは帰っていった。
「さてと…俺も頑張って恋人見つけなきゃ」
あれから二週間ほどが過ぎたある日。
「…」

たけしは部屋で一人、あるものに見入っていた。
「嘘だろ…」
大きな目を開けて、なにやらものすごく驚いている様子。
「当たってる…」
いったいどうしたというのか？
「１００万当たってる！」
なんと先日買った宝くじが当たっていたのである。しかもその額１００万円！！
「やったーーー！！」
大喜びのたけし。
「いやー、神様はやっぱり見てるんだなあ」
満面の笑みのたけし。
「よっしゃ。これでやっと車が買い換えられるぞ～」

それから一週間後。たけしは近所の中古車屋に来ていた。たけしはもう１０年近く今の車に乗っている。車自体の年式は１５年くらい前の車だ。たけしはいい加減、買い換えたかったのだ。
「よし、探そう」
一応、お目当ての車はあった。あとは希望価格で置いてればいいのだが。
たけしのお目当てはスカイバードというスポーツカー。７～８年前に人気のあった車で当時の新車価格は２００万くらい。なんとか１００万をきる価格であればいいのだが。
たけしが見て回ってると、店員が近寄ってきた。
「いらっしゃいませ」
「あ、どうも」
「何かお探しでしょうか？」
「えっと、スカイバードって車が欲しいんですけど」
「スカイバードですね。いい車ですよね、あの車は」
「ええ」

「現在ここに展示はされておりませんが、他の支店の在庫状況をお調べいたしましょうか？」
「ええ、そうですね」
「では、こちらのほうへお入りください」
たけしは店内へと通された。
「では、調べてみますね」
店員はパソコンを使って調べ始めた。
「えっとですね…ありました。Ｂ支店に2台、Ｃ支店にも2台ありますね」
「そうですか。えと、できれば１００万を切る値段であればいいんだけど…」
「値段は…Ｂ支店のほうはどっちも１００万円以上しますね。Ｃ支店のほうは、あっ、一台ありますよ、値段は９５万円、程度もいいし、どうでしょうか？」
たけしは詳細を見せてもらった。
「いいですね。じゃあさっそくＣ支店に行って来ます」
「お客様、よかったらこちらのほうへ持って来ることも可能ですが？」
「ほんとですか？」
「はい。ただ手数料５００円だけ必要になってくるのですが…」
「いいですよ。じゃあ、お願いします」
「それと、明日になってしまうのですが…。Ｃ支店は少々遠いもので…」
「いいですよ。えと、この店は何時までやってますか？」
「夜１０時まで営業しております」
「そんなに遅くまで？」
「はい。朝１０時から夜１０まで、年中無休で営業しております」
「…、あの…もしかして…会社名のテンテンって…朝１０時から夜１０時まで営業してるって意味ですか？」
「はい。さようでございます」

店員は笑顔だった。
「そうなんですか！」
（知らなかった…。この店けっこう老舗なのに、今日まで名前の由来知らなかったよ…）
「じゃあ、明日また来ますね」
「はい。お待ちしております」
たけしは帰っていった。どうでもいいことだが、会社名の由来がひとつ分かって、ちょっと気分がよかった。

その夜。
「お金あるし、久々に飲みに行こうかな」
たけしはいわゆるキャバクラへでも行こうと考えていた。人間お金を持つと、使いたくなるものである。
そして夜１１時ごろ。たけしはあるお店に来ていた。
「いらっしゃいませ！」
明日は仕事なので、そんなに長居はするつもりは無いが、しかしそれは気分しだいだったりもする。
席に座るたけし。
「いらっしゃいませ。本日ご指名のほうはございますか？」
ボーイが聞く。
「いえ。ありません」
たけしは初めて来る店なので、指名のしようがなかった。
「承知しました」
ボーイは去り、数分後、ある女性がやってきた。
「いらっしゃいませ…」
「あっ…」
たけしは驚いた。なんとそれは相沢ようこだった。
「たけし君…」
「相沢…さん…」
きれいに着飾っているようこ。本当に美しかった。肌もきれいで、

5歳くらい歳を偽ってもまったく分からないくらいだった。
「こんばんは。ようこって呼んでね」
「う、うん」
笑顔のようこ。仕事だからというのもあるだろうが、少し酔っているようだった。
「まさかこんな所で会うなんてね」
「そうね。たまに来るけどね。学生時代、見たことある人とか」
「まあ地元だからね」
二人はとりあえず乾杯した。
「いつからいるの？」
「最近よ」
「あの…例の仕事は…」
「ああ、マルチ？やめたわ。あなたの言うとおり儲からないし」
「そ、そう。よかった」
たけしはようこに見とれていた。
「けどね、ちょっと借金が出来ちゃってね」
「借金？」
「あの頃、私どうかしてて、もっと売り上げなくちゃって必死になってて…まあ上からあおられてたってのもあるんだけど…」
「それで？」
「新規の会員がなかなか取れないから、自分で高価なもの買ったりしちゃったの。ローン組んで」
「マルチなら…よくある話だね」
「だから今、夜はここで、昼はコンビニで働いてるの」
「そ、そうなんだ。大変だね」
「まあ、仕方ないけどね。自業自得かな…」
そう言いながらも、ようこは少し疲れているようだった。
「ちなみに…いくらくらいなの？借金」
「４０～５０万くらいかな。三桁いってたら風俗いきだったわ」
「…」

たけしは言葉が出なかった。そこで話題を変えることにした。
「そ、それにしてもさ、ようこさん、きれいだね」
「ほんとに？ありがと。でも若い子には負けるわ」
「いやいや、全然負けてないよ」
「ふふふ、ありがと」
その後も、お酒を飲みつつ話をして、２時間ほどして、たけしは帰ることにした。
「じゃあね、ようこさん」
「うん。今日はありがとう」
「そうそう。もしよかったら、働いているコンビニ教えてもらえるかなあ？」
「ええ。えと、神竜っていうラーメン屋あるでしょ？そのとなりよ」
「おお、分かる分かる。わりと新しいコンビニだね」
「そうね。まだ出来て一年くらいじゃないかな」
「また行くよ」
「ありがと」
「じゃあね」
たけしは帰っていった。たけしは密かにある決心をしていた。

ある日。
たけしは今日は仕事は休み。たけしはようこの働くコンビニに来ていた。
「もうそろそろだな…」
たけしはようこが何時にバイトが終わるのかを聞いていたので、その時間に来ていた。ある用事のために。車は買っていない。テンテン（例の中古車屋）に電話してキャンセルしていた。
そして、間もなくしてようこが出てきた。
「きた！」
たけしは車を降りた。
「ようこさん」

「？…たけし君」
「ごめん、急に。ちょっといいかな？」
「え、うん…いいけど…」
「じゃあ、ちょっと乗って」
たけしとようこは、たけしの車に乗った。
「ごめんね、急に」
「ううん、いいけど、どうしたの？」
「はい、これ」
たけしはおもむろに封筒を取り出した。
「えっ？」
「中に５０万入ってる。借金の返済に使ってよ」
「ええ！？」
ようこは驚いた。
「だ、駄目よ！もらえないわ、こんなの！」
「いいから。どうせあぶく銭だし、困ってる人は放っておけないよ」
「あぶく銭？」
「宝くじが当たったんだ。１００万」
「そ、そうなの…。でも駄目よ！悪いわ！」
「いいって」
「べ、別にたけし君にマルチの勧誘を断られたせいで、借金をするはめになったんじゃないし、気にしなくていいのよ」
「そんなんじゃないよ。困ったときはお互い様って、それだけさ」
「でも…」
ようこは受け取りづらかったが、正直受け取りたかった。
「いいから、いいから。そうだ、じゃあ今度そこの神竜でラーメンおごってよ。ねっ！」
たけしは笑顔だった。
「たけし君…ありがとう…。本当にありがとう…」
ようこは深々と頭を下げた。
「いいってことさ」

たけしは男を見せた。たけしはようこに惚れていたのだ。
そしてたけしは去っていった。その去っていく車を、ようこはずっと見ていた。

数日後。
約束どおり、ようこはたけしと一緒にラーメン屋「神竜」にきていた。
ちなみに読み方は「しんりゅう」ではなく「じんりゅう」らしい。店主の話では…。
「いやあ、うれしいな。ようこさんに誘われるなんて」
「…」
「どうしたの？」
「いえ、だって…私のおごりって言っても、元はたけし君のお金だし…」
「いやいや、俺があげるっていったんだから、法律的にはようこさんのお金さ」
「…」
それでもようこは申し訳ない気持ちだった。
たけしはあえて明るく振舞った。ようこに気を使わせたくなかったのだ。
「さて、じゃあ行こうか」
二人は店に入った。
「いらっしゃい」
少し頑固そうな店主が言った。
二人はラーメンを注文し、間もなくしてラーメンがやってきた。
「いただきます」
二人はラーメンを食べ始めた。
「うん。美味しいね」
あまり会話も無いまま、二人は食べ終わり、店を出た。
「美味しかったね。今度、村上と来ようかな」

「そうね。村上君、元気？」
「元気だよ。それにさ、もうすぐ結婚するんだってさ。いや、もうしたのかな？」
「そうなの？」
「相手の写真見せてもらったけど、これがすんごいべっぴんでさあ」
「そうなんだ」
「まあ、ようこさんには負けるけどね」
「…」
ようこは照れたように微笑んだ。
「ね、ちょっとドライブ行こうよ」
「え？」
「ちょっとだけ」
「う、うん」
二人はたけしの車に乗り込み、走り出した。
３０分ほどして、二人はきれいな夜景の見える山に来ていた。
「きれいね」
ようこが言う。
「そうだね」
たけしが言う。そしてたけしは続けた。
「ねえ、ようこさん。ようこさんは今彼氏はいるの？」
「え？…今は…いないけど…」
「じゃ、じゃあさ…」
「…」
「俺と…つきあってくれないか？」
「！…」

☆その６へ続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8190k/

恋愛しよう　その５

2010年10月8日15時12分発行